

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣先機関等利用マニュアル

2012年 1月 14日

派遣者氏名（専門分野）	■■■■■	（ 東洋史 ）
-------------	-------	---------

派遣期間	2011年 7月 23日 ～ 2011年 9月 20日
------	-----------------------------

派遣研究機関

国	都市	訪問機関
中国	西安	陝西歴史博物館、西安博物院、碑林博物館

利用マニュアル（利用申請に必要な書類、手続き、リサーチ方法を記入）

西安の石刻資料は、複数の所蔵先に分散しているため、まず所蔵先を特定する必要がある。博物館などで公に公開されているものや、所蔵目録に所在が明記されているものの特定は容易であるが、整理作業が進んでいない新出資料もかなりあり、それらの所蔵先を特定するのは難しい。たとえば、西安で発掘された石刻資料であっても、その発掘隊の拠点が北京である場合は、北京の中国歴史博物館などに所蔵されることがある。よって、見たい墓誌が、いつ、どの研究機関によって発掘されたのか、その発掘隊のリーダーは誰だったのかを事前に調べておいて、直接その研究機関に問い合わせ、所蔵の有無と、実見ができるかどうかを確認するのがよい。ただし、所蔵先での整理作業が進んでいない場合（たとえば、墓誌同士を積み重ねて所蔵し、取り出しが不可能な状態）は、実見ができないことが多い。

所属先の特定方法について：碑林博物館であれば、総目録が作成されているので、特定は容易である。また、近年収集された墓誌については、『西安碑林博物館新蔵墓志彙編』（綫装書局 2007年）で確認が可能である。それ以外の所蔵については、2011年に長安博物館が出版した『長安新出墓誌』で確認が可能である（ただし、2011年9月の時点では移転準備中により調査はできなかった）。

陝西歴史博物館、陝西省考古研究院、西安博物院などが所蔵している墓誌については、所蔵目録が作成されておらず、個別に発表された発掘報告書（『文物』、『考古與文物』などに掲載される「簡報」など）に当たることとなる。所蔵先は、基本的には発掘隊の所属機関にあるため、発掘機関と、発掘隊のリーダーなどを調べたうえで直接連絡を取る（または知り合いの中国人研究者を通じて行う）のがよい。

墓誌の原物調査について：碑林博物館に所蔵される墓誌や碑文、経幢などは、展示されているものについては写真撮影も可能であるので、一般客と同様の方法で入館し、調査することができる。倉庫に所蔵されている石刻資料については、公開はしていないため、実見が可能かどうかを直接問い合わせる。ただし、ほとんどが整理段階であるので実見することは難しいと思われる。陝西歴史博物館についても、事前に実見が可能かどうか問い合わせる。ただし、今回の調査のように、原石は倉庫内に保管中で取り出しが困難であるため（事前に調査依頼を出している）、拓本での調査になることもある。

陝西省考古研究院の場合、墓誌や経幢等の石刻資料をはじめとする考古発掘物の大部分は、西安の市内ではなく高陵県の倉庫内に保管されており、整理作業中のため公開されていない。ただし、平成24年後半期には倉庫の拡張工事が終了し、墓誌などの石刻史料の整理作業も完了する予定であるという。よって、工事終了後であれば、希望する遺物を実際に調査できるようになる可能性が高い。